

ちょっと ブレイク しませんか?

第 52 回

リリーのすべて

(2015年 英・米・独映画)



イソップ寓話に「ハイエナ」と題する小話がある。

ハイエナは年ごとにその性質を変えて、牡になったり牝になったりすると言われている。ある時、牡のハイエナが牝に対していかかわしい振る舞いに及んだ。牝が答えて言うには「どうぞおやりなさい。まもなくあなたが同じことをされる立場になるのです」

「リリーのすべて」(2015年英・米・独)は、1926年、デンマークの首都コペンハーゲンで展開された風景画家の夫と肖像画家の妻との数奇な物語だ。ある日のこと、妻が制作中の絵のモデルである女性の踊り子が来られなくなったため、急場凌ぎで夫に脚部のモデルを頼む。ストッキングと女性靴を身につけた夫が自己陶醉に浸る場面がある。ナルシシズムは自己嫌悪の正反対だ。妻は何を思ったか夫を女装させ「リリー」という名の女性として知人の宴席に連れて行く。すると宴席でリリーが男性と親しげに接し始める。その挙動を目の当たりにした妻は動揺を隠せない。精神的には女であることに目覚めた夫は、その後もリリーとして男性と密会を続ける。鏡に映る己の裸体に見蕩れる場面もある。それ以来女性・リリーとして生きる比率が増していく夫は心と体の不一致に悩み始める。当初はそんな夫に困惑した妻だったが、次第に理解を深めて行く。女装した夫＝リリーをモデルとした絵を描き次第に評価が高まる。それでも妻はせめて自分と一緒にの時は男のままでいて欲しいと夫に懇願するが、夫は「努力してみる」としか答えず、しかも女装した宴席での体験がきっかけではないと打ち明けるのだった。やがて、夫はリリーとして過ごす時間が増え絵を描くのを止める。夫の異変に気づいた妻は思い切って夫を精神科医のもとに連れてゆくが、妄想とか性倒錯と一蹴される。画家としての名声が夫には及ばなかった妻の絵が一流の仲間入りしたのを契機に夫妻はパリに移住する。パリ在住の夫の幼馴染みの画商に妻は真実を打ち明ける。話を聞いた画商はリリーを別の精神科医に診させるが、統合失調症と診断されてしまう。ところが「それは病気ではない。夫の言うことは正しい」という産婦人科医が現れ、性別適合手術の可能性を告知する。リリーは人類史上初の性別適合手術を受けることを決断するのだった。

この映画の原作は「The Danish Girl」(2000年の小説)だ。性別は何時頃発生するのか。受精後7～8週まで雌雄は未分化だが、染色体がXXかXYかによって性腺分化が起こり、性ホルモン分泌で表現型が決まる。トランスジェンダーは生物学的性(sex)と性意識(gender)との不一致のことだ。日本では「性同一性障害者*の性別の取扱いの特例に関する法律」が成立し、性別適合手術も保険適用となっている。リリーの妻の非凡さはトランスジェンダーの夫を揺れながらも受容し続けた人間愛にあった。ハイエナは両性具有ではないし、頭が鈍く不気味に笑う大食漢の腐肉食動物ではなく、賢くて愛情に溢れ霊長類にも匹敵するほどの社会を作りライオンよりも狩りが上手いという。ところで、イソップがこの寓話で「自分が治める人々の責任を厳しく追及するが、一朝事あれば逆にその人々から責任を問われる役人たちのための話」と諭したのは今日でも通用しそうだ。

★性同一性障害という病名がないと性的適合手術は保険診療に出来ない。アイデンティティとは自己意識なので身体よりも心が優先される。心を身体に適合させるという治療法は浮かばなかったのだろうか?リリーの診療録は、デンマークに侵略したナチスによって焼却されたという。戦争は人類最大の愚行だが、今年も黒海周辺で始まってしまった。



かゆ かわ ゆう へい
粥川 裕平
(精神科医・映画評論家)

名古屋工業大学 名誉教授
かゆかわクリニック院長